ざしき童子のはなし

宮沢賢治

ぼくらの方の、ざしき童子（ぼっこ）のはなしです。

あかるいひるま、みんなが山へはたらきに出て、こどもがふたり、庭（にわ）であそんでおりました。大きな家にだれもおりませんでしたから、そこらはしんとしています。

ところが家の、どこかのざしきで、ざわっざわっと箒（ほうき）の音がしたのです。

ふたりのこどもは、おたがい肩（かた）にしっかりと手を組みあって、こっそり行ってみましたが、どのざしきにもたれもいず、刀（かたな）の箱（はこ）もひっそりとして、かきねの

檜が、いよいよ青く見えるきり、たれもどこにもいませんでした。

ざわっざわっと箒の音がきこえます。

とおくの百舌の声なのか、北上川の瀬の音か、どこかで豆を箕にかけるのか、ふたりでいろいろ考えながら、だまって聴いてみましたが、やっぱりどれでもないようでした。

たしかにどこかで、ざわっざわっと箒の音がきこえたのです。

も一どこっそり、ざしきをのぞいてみましたが、どのざしきにもたれもいず、ただお日さまの光ばかりそ

こらいちめん、あかるく降（ふ）っておりました。

　こんなのがざしき童子（ぼっこ）です。

「大道（だいどう）めぐり、大道めぐり」

　一生けん命（めい）、こう叫（さけ）びながら、ちょうど十人の子供（こども）らが、両手（りょうて）をつないでまるくなり、ぐるぐるぐるぐる座敷（ざしき）のなかをまわっていました。どの子もみんな、そのうちのお振舞（ふるまい）によばれて来たのです。

　ぐるぐるぐるぐる、まわってあそんでおりました。

　そしたらいつか、十一人になりました。

　ひとりも知らない顔がなく、ひとりもおんなじ顔が

なく、それでもやっぱり、どう数えても十一人だけおりました。そのふえた一人がざしきぼっこなのだぞと、大人が出て来て言いました。
けれどもたれがふえたのか、とにかくみんな、自分だけは、どうしてもざしきぼっこでないと、一生けん命眼を張って、きちんとすわっておりました。
こんなのがざしきぼっこです。

それからまたこういうのです。
ある大きな本家では、いつも旧の八月のはじめに、如来さまのおまつりで分家の子供らをよぶのでしたが、

ある年その一人の子が、はしかにかかってやすんでいました。

「如来さんの祭り(まつ)へ行きたい。如来さんの祭りへ行きたい」と、その子は寝(ね)ていて、毎日毎日言(い)いました。

「祭(まつ)り延(の)ばすから早くよくなれ」本家のおばあさんが見舞(みま)いに行って、その子の頭をなでて言いました。

その子は九月によくなりました。

そこでみんなはよばれました。ところがほかの子供(こども)らは、いままで祭りを延ばされたり、鉛(なまり)の兎(うさぎ)を見舞いにとられたりしたので、なんともおもしろくなくてたまりませんでした。

「あいつのためにひどいめにあった。もう今日は来ても、どうしたってあそばないぞ」と約束しました。

「おお、来たぞ、来たぞ」みんながざしきであそんでいたとき、にわかに一人が叫びました。

「ようし、かくれろ」みんなは次の、小さなざしきへかけ込みました。

　そしたらどうです。そのざしきのまん中に、今やっと来たばっかりのはずの、あのはしかをやんだ子が、まるっきりやせて青ざめて、泣きだしそうな顔をして、新しい熊のおもちゃを持って、きちんとすわっていたのです。

「ざしきぼっこだ」一人が叫んでにげだしました。みんなもわあっとにげました。ざしきぼっこは泣きました。

こんなのがざしきぼっこです。

また、北上（きたかみ）川の朗妙寺（ろうみょうじ）の淵（ふち）の渡（わた）し守（もり）が、ある日わたしに言いました。

「旧暦（きゅうれき）八月十七日の晩（ばん）、おらは酒（さけ）のんで早く寝（ね）た。おおい、おおいと向（む）こうで呼（よ）んだ。起（お）きて小屋（こや）から出てみたら、お月さまはちょうどそらのてっぺんだ。おらは急（いそ）いで舟（ふね）だして、向こうの岸（きし）に行ってみたらば、

紋付を着て刀をさし、袴をはいたきれいな子供だ。たった一人で、白緒のぞうりもはいていた。渡るかと言ったら、たのむと言った。子どもは乗った。舟がまん中ごろに来たとき、おらは見ないふりしてよく子供を見た。きちんと膝に手を置いて、そらを見ながらすわっていた。

　お前さん今からどこへ行く、どこから来たってきいたらば、子供はかあいい声で答えた。そこの笹田のうちにずいぶんながくいたけれど、もうあきたから他へ行くよ。なぜあきたねってきいたらば、子供はだまってわらっていた。どこへ行くねってまたきいたらば、

更木(さらき)の斎藤(さいとう)へ行くよと言った。岸についたら子供はもういず、おらは小屋(こや)の入口にこしかけていた。夢(ゆめ)だかなんだかわからない。けれどもきっと本当だ。それから笹田がおちぶれて、更木の斎藤では病気もすっかり直ったし、むすこも大学を終わったし、めきめき立派(りっぱ)になったから」

こんなのがざしき童子(ぼっこ)です。

底本：「セロ弾きのゴーシュ」角川文庫、角川書店
１９５７（昭和32）年11月15日初版発行
１９６７（昭和42）年４月５日10版発行
１９９３（平成５）年５月20日改版50版発行
初出：「月曜」
１９２６（大正15）年２月号
入力：土屋隆
校正：田中敬三
２００８年３月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。